

2017年度 自己点検・評価【神学部】

C票

<目標、行動計画>進捗確認シート

提出日:2018年 2月 22日

2021年度に向けた教育研究目標

責任者	神学部長	作成部局	神学部
-----	------	------	-----

【A票:教育研究目標1】

(タイトル)

国際社会に必要な基礎学力の錬成

(狙い内容)

キリスト教を中心として、宗教的教養を養い、国際社会と対話する能力を修得する。

1. 教育研究目標を実現する上での2021年度のめざす姿(目標)

専門基礎科目群(必修科目)ならびに、宗教学関連科目を充実させ、キリスト教を切り口とした宗教リテラシー教育の充実を図る。
また、変化を続ける国際社会へ対応するため海外文化を体験する機会提供の充実を図る。

2. 達成度評価

評価指標	評価尺度
下記の行動計画における取り組み状況	A: 行動計画の取組みの実施と評価・検証が行われている B: 現状の分析とシラバスの整備が完了している C: 行動計画実行に向けた方針の確定 D: 行動計画の検討・立案

3. 年度毎の目標値

		2015年度	2016年度	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度
2016年度 自己点検・評価時 点		D 担当者を検討した。	D CMを整備。留学における単位認定について内規改正を予定。	C ■行動計画実行に向けた方針の確定 ・CMをもとにしたシラバス内容の検証	B 2018年度時点の現状を分析し、関連する科目のシラバス整備が完了している。	A 行動計画の取組みの実施と評価	A 行動計画の取組みの実施と評価	A 行動計画の取組みの実施と評価
2017年度 進捗状況 & 今後の 目標値	評価 尺度: A~D	D	D	C				
	見込・ 実績・ 目標 (値又は 状況)	担当者を検討した。	CMを整備。留学における単位認定について内規を改正。	実績 シラバス検証を行う体制を構築。CMをもとにシラバス内容の検証を行う予定(2018/1/24時点)。				

【2017年度の進捗状況について】

グローバル化促進を目指し宗教リテラシーの教育を含め、カリキュラム・マップ(CM)を整備。全科目にわたるシラバスの内容を検証すべく、チェック体制を構築した。

2017年度の取組み状況の確認

2017年度の取組みは、当初の目標どおりに進んでいるか？

→ はい・いいえ

<評価専門委員・第三者評価結果> 2017年12月22日公示

- ・ 行動計画①の評価尺度はステップを示しただけで、適正な順序尺度になっていないように思われます。(A)
- ・ 教育研究目標1の実現に向けて、カリキュラム・マップの精査やシラバスの検証を進めている点は評価できます。
- ・ 行動計画②③の評価尺度に関して、受験者数・受講生数の増加を達成目標とするのであれば、関連科目の充実以外の取り組みも期待されます。(B)
- ・ シラバスを中心に教育研究目標の達成を目指す点は適切と考えられます。一方でそれに関する行動計画1において評価指標と評価尺度の関連性が見えづらいところがあります。ここではシラバスの見直しに絞った評価尺度とする方が、具体的な行動計画につながりやすくなり、ひいては教育研究目標達成への道筋が明確になりそうです。(D)
- ・ 計画どおりにインターンシッププログラムの受講者数の確保が期待されます。(E)
- ・ シラバス内容の検証が予定されており、評価できます。
- ・ インターナショナルプログラムの受講者数が減少しており、その原因についての確認と改善活動が望まれます。(F)
- ・ 目標に向けて検討が進んでおり、評価できます。(G)
- ・ 行動計画②について2017年度の評価(A～D)が記載されていないようです。すでにAに達しているため、次の行動計画の策定が期待されます。(H)
- ・ 3ポリシーに基づく教学マネジメントの観点から、今後、カリキュラムマップを基にしたシラバスの検証を行う中で、是非ディプロマポリシーやカリキュラムポリシーとの整合についてもチェックされることを期待します。
- ・ 行動計画④の2017年度の進捗見込みが3%と低い状況になっています。今後の改善に期待します。(I)
- ・ シラバスの改善は学習時間増に向けた全学的な動きに沿った取り組みであり評価できます。シラバスの改善はもちろんですが、教員の講義方法のブラッシュアップについても今後取り組みが期待されます。(J)

【A票:教育研究目標2】

(タイトル)
少人数による教育

(狙い内容)
少人数の授業によって、学問研究の基礎を学び、みずから社会の課題や問題を発見することのできる積極的な学習環境を構築する。

1. 教育研究目標を実現する上での2021年度のめざす姿(目標)

更なる少人数による細やかな教育・研究指導を受ける機会を増やすことで、授業内容の理解力向上を目指し、学部内の教育を充実させることを目標とする。

2. 達成度評価

評価指標	少人数教育の強化科目を選定する。シラバスに『少人数実施』と明示し、学生へ意図を伝達したうえで検証を行う。	評価尺度	A: 少人数科目の見直しと充実への取組み B: 少人数教育の実施・検証が行われている C: 少人数教育を行う教科科目のシラバスの改訂 D: 少人数教育を行う教科科目の選定
-------------	--	-------------	--

3. 年度毎の目標値

		2015年度	2016年度	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度
2016年度 自己点検・評価時 点		D 次年度開講準備にあたり、クラス編成について検討を行った。	C クラス改編を行い、シラバス改訂を行った。	C 3年次からの「研究演習A・B」を開講する。	B 4年次からの「研究演習C・D」を開講する。	A 少人数教育の見直し	A 少人数教育の見直し	A 少人数教育の見直しと具体的な改善計画の策定
2017年度 進捗状況 & 今後の 目標値	評価 尺度: A~D	D	C	実績 C				
	見込・ 実績・ 目標 (値又は 状況)	次年度開講準備にあたり、クラス編成について検討を行った。	クラス改編を行い、シラバス改訂を行った。		募集要項にて少人数で実施することを明記し、「研究演習」を開講。			

【2017年度の進捗状況について】

英語科目においてクラスを細分化し、シラバスにおいて少人数で実施する旨を明記。習熟度別に開講することで、個々のレベルに応じたクラスを開講する一方、質の担保を図り到達目標などを確認べく、担当者会を随時開催。授業実施に関するヒアリングを行っている。その他、初年次に開講している基礎(導入)的な科目についてもクラスを増加させ、上級年次における専門的な学びに向けて基礎を養うことを位置付けている。2017年度から「研究演習A・B」を開講。実施状況や選考方法等は年度ごとに検討を行う予定。

2017年度の取組み状況の確認

2017年度の取組みは、当初の目標どおりに進んでいるか? → **はい**・いいえ

<評価専門委員・第三者評価結果> 2017年12月22日公示

- ・ 着実な進捗が認められます。今後も計画通り進捗することを期待します。(A)
- ・ 少人数教育の強化を着実に進めている点は評価できます。(B)
- ・ 3. の「年度毎の目標」において、「言語教育科目(英語科目)においては、1年次秋学期・2年次春学期はクラス分けを実施していない(計30名程度)。更なる少人数化を実施し、内容理解度の向上を図る必要がある。」とありますが、言語教育科目において1クラス30人は「少人数」とは言えません。具体的に、何人を目標にして少人数化を進めようとするのかを明示する必要があります。(C)
- ・ 行動計画1の評価設定はわかりやすく、合理的です。一方で授業に関する調査結果をどのように研究目標の改善、達成に向けての具体的な策を検討されることが望まれます。(D)
- ・ 最履修者の%が減少し、改善が進んでいます。(E)
- ・ 英語の各クラス再履修者平均を改善する具体的な行動力計画の設定が期待されます。(F)
- ・ 目標に向けて着実に進捗しており、評価できます。(G)
- ・ 行動計画②について、次年度以降A評価を達成するためには、再履修者を減らすための対策の検討が期待されます。(H)
- ・ 今後、少人数教育の効果が表れ、学生の学修意欲の向上や再履修者の減少に繋がることを期待しています。(I)
- ・ 行動計画②で具体的な数値による評価がなされたことは評価できます。残念ながら今年度は再履修となる割合が目立って減ることはなかったようですが、継続して各科目の質向上に向けた検証と改善の取り組みが期待されます。(J)

【A票:教育研究目標3】

(タイトル)

“Mastery for Service”を実践する社会人の育成

(狙い内容)

キリスト教ならびに宗教に関する総合的な基礎知識に裏打ちされ、しかも、現代の社会と人間に対する洞察力を持ち、明確な人権意識を持って、“Mastery for Service”を実践することのできる人材を育成する。

1. 教育研究目標を実現する上での2021年度のめざす姿(目標)

2015年度から開始されたディアコニア・プログラムやこのプログラムに関連したハンズオン・プログラムを充実させ、社会との関わりへの関心を高め、ディアコニア・プログラム修了者から社会福祉事業従事者・NPO活動従事者を輩出することを目標とする。

<変更時記入欄>

2015年度から開始されたディアコニア・プログラムやこのプログラムに関連したハンズオン・プログラムを充実させ、社会との関わりへの関心を高め、ディアコニア・プログラム修了者から社会福祉事業従事者・NPO活動従事者を輩出することを目標とする。
 ※ディアコニア・プログラムとは、特にキリスト教精神をもって社会福祉事業で働く人材を育成する教育プログラム。ディアコニアとは、新約聖書に使われているギリシャ語で「奉仕」「給仕」を意味し、そこから発展して、キリスト教社会福祉を表す概念となった言葉である。

<変更理由記入欄:2021年度のめざす姿(目標)を変更した場合、その理由を記入>
 第三者評価の結果を受け、ディアコニア(・プログラム)の説明を追記。

2. 達成度評価

評価指標	ディアコニア・プログラムの新規登録者数	評価尺度	A: 5名以上 B: 4名 C: 3名 D: 2名以下
-------------	---------------------	-------------	--------------------------------------

3. 年度毎の目標値

		2015年度	2016年度	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度
2016年度 自己点検・評価時 点		D	A	A	A	A	A	A
		履修説明会などを実施し、募集を行った。	5名の申込み、履修許可を行った。	新規登録者数が5名以上	新規登録者数が5名以上	新規登録者数が5名以上	新規登録者数が5名以上	新規登録者数が5名以上
2017年度 進捗状況 & 今後の 目標値	評価 尺度: A~D	D	A	実績	C			
	見込・ 実績・ 目標 (値又は 状況)	履修説明会などを実施し、募集を行った。	5名の申込み、履修許可を行った。	実績	3名の申込み、履修許可を行った。			

【2017年度の進捗状況について】

履修説明会に加え、広報展開についてを協議し、神学部ホームページにて当該プログラムに関するページを公開。学部生のみならず、社会福祉の現場などへの呼び掛けなど社会人への周知方法を今後も検討する。1期生が修了を迎えることから、学部生への周知についても改めて検討を行う。

2017年度の取組み状況の確認

2017年度の取組みは、当初の目標どおりに進んでいるか? → **はい**・いいえ

<評価専門委員・第三者評価結果> 2017年12月22日公示

- ・ 行動計画①の評価尺度が適正な順序尺度になっていません。これに関連して、2020年度・2021年度の目標値がDに戻っているのも(意味するところはわかりますが)違和感があります。(A)
- ・ 人材の育成や輩出の評価指標としては、プログラムの新規登録者数よりも、プログラムの修了者もしくは社会福祉事業者等の輩出数のほうが適切であるように思われます。(B)
- ・ ディアコニア・プログラムについて、2017年度も進捗状況についてD評価がついています。今年度はこのプログラムの改訂の年にあたるようですが、どのような理由で進捗しないのかを、示すことが望ましいと思われます。
- ・ また、前年度の第三者評価のコメントにあった、「ディアコニア・プログラム」の簡単な説明を要する、という意見には答えられていないようです。(C)
- ・ ディアコニア・プログラムの新規登録者数の増加が期待されます。(E)
- ・ ディアコニア・プログラムについての周知、広報活動を継続的に実施していくことが望まれます。(F)
- ・ ディアコニア・プログラムの新登録者、ハンズオン・プログラム授業履修者、社会福祉事業従事者輩出の各目標は2017年度は目標値には届いていないようですが、周知方法等の改善を図りながら、引き続き目標達成に向けて学部が一丸となって取り組みを進めていただくことを期待しています。(I)
- ・ 関学のスクール・モットー、学部の理念に基づく取り組みは評価できます。プログラムの1期生が修了を迎えるありますが、行動計画③の見込み評価が“D”というのは、受講者が社会福祉事業やNPO以外への進路が内定しているということでしょうか。
- ・ 行動計画③について、プログラム受講者と事業やNPOとの出会いの場をどれくらい、あるいはどんな場を設けたことでの結果なのか、具体的な記述があれば次の改善につながります。(J)

【A票:教育研究目標4】

(タイトル)
専門的研究者の育成

(狙い内容)
キリスト教ならびに宗教に関する基礎知識を修得した上で、さらに専門的な研究に関心を持つ学生を育成する。

1. 教育研究目標を実現する上での2021年度のめざす姿(目標)

大学院との合併授業を充実させ、専門的な研究への関心を高めるとともに、卒業論文の執筆意欲を高めることを目標とする。

2. 達成度評価

評価指標	独自の研究テーマと取り組む時間や高度な専門教育を受ける機会を増やし、大学院進学者数(他大学院を含む)を維持ならびに増加させる。	評価尺度	A: 8名以上 B: 5~7名 C: 3~4名 D: 2名
-------------	---	-------------	--

3. 年度毎の目標値

		2015年度	2016年度	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度
2016年度 自己点検・評価時 点		C 評価尺度Bに相当した。	A 一次試験終了段階において評価尺度Aに相当した。	C 4名以上	B 5名以上	B 6名以上	B 7名以上	A 8名以上
2017年度 進捗状況 & 今後の 目標値	評価 尺度: A~D	C	B	実績	D			
	見込・ 実績・ 目標 (値又は 状況)	評価尺度Bに相当した。	入学者数はBに相当した。		入学者はDに相当すると見込まれる。(2018/1/24時点)			

【2017年度の進捗状況について】

主に学部生を対象に、研究演習の説明会やキャリアガイダンスを行った。その中で大学院進学に関する説明会も実施し、進学にあたっての研究演習など、今後の学びに対する取組み方などを行った。

2017年度の実績状況の確認

2017年度の実績は、当初の目標どおりに進んでいるか？

→ はい ・ いいえ

<評価専門委員・第三者評価結果> 2017年12月22日公示

- ・ ほぼ順調に進捗していると認められます。(A)
- ・ 行動計画は進展が認められ、評価できます。(B)
- ・ 研究に関心をもつ学生を増やす取り組みが進んでいます。(E)
- ・ 大学院進学者数の確保は、神学部に限らず難しい問題ですが、研究演習等の工夫や優秀論文等により学生をモチベートしながら、是非引き続き取組みを進めていただくことを期待しています。(I)